

# 金沢における洋学の展開と壮猶館

——西洋流砲術の受容を中心に——

蔵原清人

## はじめに

江戸時代末期の金沢における洋学研究は、主に砲術、医学、航海術の三つの領域で進められた。これらはいずれもオランダからの伝来であり、当時は西洋学ともいわれた。ここでは、その中で西洋流砲術の受容を中心にとりあげる。

砲術は単に射撃の技術にとどまらず、火薬の取扱いや製造、砲身の鑄造などについての知識と技術を理解し習得することを必要とする。常に発展する技術に対応するためには原書について学ぶことも必要である。そして直接の目的である射撃は、単に弾丸を発射すればいいのではなく、戦法の中に位置づけられているために、戦法全体を理解しなければならない。すなわち、西洋流砲術であれば西洋における兵の動作や兵力の運用、指揮や号令などの様式も理解する必要がある。言葉、服装などの問題も切り離してとらえることはできないのである。砲術に限ることではないが、これらを翻訳したり

日本の風習に改めるために、まずは西洋の方法を受け入れ、それに従って行う他はない。

しかしながらこれは、藩内の守旧派と進取派の対立を促進する要因となった。もともと古流といわれる伝来の砲術も、戦国期にポルトガル人によって伝えられたものであるから、もともと西洋式である。守旧派は古流を支持し新伝の西洋流を批判するのだが、この時にまず問題となったのが言葉や服装などの問題であった。そして西洋流砲術の教授を担った壮猶館の処遇や位置づけが問題とされた。守旧派と進取派のいずれが優勢になるか、それぞれの名分の正当性は、当時の日本の政治状況が大きく揺らぐたびにその立場が入れ替わった。そして最終的には名分よりも現実の中でどちらの砲術流派が役に立ったか、実地の経験が決着をつけることになる。

本稿ではこの経緯を検討し、最後に教育史的意義を考察したい。<sup>1</sup>

## 一、洋学の導入と壮猶館の設置

加賀藩では西洋流砲術については大橋作之進が中心となり、河野久太郎、加藤九八郎、黒川良安、松下謙作などが研究を始め、弘化三年（一八四六）には大砲を鑄造している。また藩主は小川群五郎らに砲術修行を命じ、嘉永元年（一八四八）には打木浜で小川らの砲術演習を見ている。<sup>③</sup>

嘉永五年（一八五二）五月には「御家中之人々砲術稽古用等簡葉私底にて差支候向も有之由」なので、願いにより安価に分け与えるとの達しがあった。ここでいう砲術稽古は西洋流に限られないが、「家中の人々」がそれぞれ行うという原則が示されている。

すでに早くから異国船の来航がしばしば問題になっていたが、四方を海に囲まれているわが国としては海防の備えを充実させることは避けられない問題である。幕府も諸藩に対して度々指令を出した。こうしたなかで砲術教授の必要に迫られてくる。経武館ではそれまで砲術稽古は行つてこなかったが、嘉永六年（一八五三）二月にはその実施について検討を進め、藩首脳である年寄に意見を提出した。<sup>⑤</sup> 嘉永六年六月にペリー来航があり、情勢は一举に緊迫した。海防の準備が緊急の課題となった。七月、幕府の指令に基づき、藩が將軍徳川家慶の病氣、死去に際して「鳴物停止中たりとも都て芸術筋之儀は大炮打試等迄勝手次第修行いたし不苦<sup>⑥</sup>」と指示したことはその切迫を示すものであるといえる。

八月四日に小川群五郎に西洋流大砲の製造を命じ、八月一〇日に

は「先年より御様子有之他家え不致指南候処」であったが、「近年海辺御手当方等格別御詮議有之御時節」であるから、「御家中等之人々望次第致入門候儀不苦候」と、希望者があれば伝授するように小川群五郎等へ指示した。<sup>⑦</sup>

実はこの六月にそれまで「中追放」を受けていた高島秋帆が赦免され、江川太郎左衛門方に引き取られたばかりであった。<sup>⑧</sup>「先年より御様子」というのはこうした処分を受けていたことを指している。加賀藩以外にも高島流砲術の伝授を受けた藩は少なくないが、この間流儀の名称を変えながらも砲術の稽古や伝授が続けている。<sup>⑨</sup>高島の赦免は公然と高島流の稽古や伝授を認めたことを意味する。これはペリー来航に対応して西洋流砲術を充実させる策によるものであった。八月一〇日の指令によつて、加賀藩もこれに対しいち早く対応したことになる。

藩の役所である算用場ではすでに七月、ペリー来航に対応した海防のために、海岸線の長い加賀にとつては「西洋流大砲・小銃数千無之而者相成申間敷<sup>⑩</sup>」との見解に達していた。しかしながら望みの者に西洋流砲術の稽古を許すとしたにも関わらず、「未入門相望候者も無之体<sup>⑪</sup>」なのである。それでこの八月の指令が出されたのであった。すなわちこの段階では藩士の間での西洋流砲術への関心はまだきわめて低かったことがわかる。

ここでは西洋流砲術の優越性を明言してはいないが、伝来の砲術を差し置いて小川流だけを奨励している。もともと武士は武芸を持つていることが主家に対する奉公の責任であり、各自の責任で身

につけ修練することが原則であった。またそれぞれの特殊の技術、すなわち家芸が武士それぞれの家のアイデンティティーでもあった。それを藩がどのように指示することは尋常ではない。家伝であるべき小川流砲術の修得について藩がどのように指示することは、客観的に見て、その家に教授や管理を任される家伝ではなくなっていることを示しているといえよう。すなわちこの段階で西洋流砲術の修得は、人々の任意の入門にゆだねるのではなく、藩として積極的に推進すべき技術となつたのである。さらにこれを確実に進めるには、師範個人の努力にゆだねるのではなく、藩として組織的に推進する必要があつた。このため藩は火術方役所を設け、八月一五日大橋作之進に西洋流砲術稽古方棟取を命じた。<sup>(12)</sup> この役所は火薬や大砲の製造とともに、砲術の教授・訓練、蘭書の翻訳も担当しており、学校としての一面を持っている機関であつた。

こうした西洋流砲術の動向に対応して、伝来武術の教授機関である経武館から先に伺いの出されていた伝来砲術の稽古の可否について、八月二日に伺いの通り計画を進めるよう指示があり、翌安政元年二月に正式に経武館での砲術稽古の実施が決定した。<sup>(13)</sup> この砲術は豊島流、中島流である。すなわち、西洋流砲術が学校で教えられるという事態を前にして伝来の流派の態度が変わつたのである。藩の側では新流を尊重したいが、伝来流派もおろそかにはできないということ、学校で教えることを認めたのであろうか。それとも伝来の砲術であつても少しでも多くの人に修得させた方がよいと考え

たのであろうか。

それまで経武館では個人技を中心とした武術に限られ、<sup>(15)</sup> 軍学や砲術などは教授されていなかった。嘉永四年（一八五二）二月の史料には、「於経武館師範不被仰付師範人」があげられており、砲術では豊島流、酒井流、福島流がある。<sup>(16)</sup> ちなみに翌年にはこの三流の他西洋流火術があげられていて、西洋流砲術の師範人が認められたことがわかる。<sup>(17)</sup> 経武館の師範ではないが「師範人」と認められているということは、これらは相伝として師範が教えるべき相手を選ぶべきであつて、入学したすべての人に教えることになる学校にはなじまないと考えられていたのであろう。<sup>(18)</sup>

西洋流砲術の普及について、藩は安政元年（一八五四）七月に指令を出した。それはまず「武術修行之儀ハ銘々心得有之事」という原則を確認した上で、「砲術之儀は異国船防御之要術」であるのに、「諸流之内西洋打方之儀は近年開候事に付きまた習熟致し候者も少」という現状を確認する。「依之火術方役所等御取建被成、其法手広に被仰付度候処、公辺よりも西洋打方相励候儀被仰渡も有之儀、弥手広に被成度思召候間、其心得を以西洋打方之儀、諸流同様心懸可申候」というのである。ここで、「諸流同様心懸可申」というのは、以上の事情を考えればまったくの御愛想というべきである。師範に對しても、「西洋流砲術師範致し候人々も火術方於役所稽古被仰付候」とした。<sup>(19)</sup>

ここでは師範に入門しての教授を否定していないとしても、西洋

流砲術は火術方役所での教授を基本とすることが明確にされたといふべきである。これによつて西洋流砲術教授は、師範と弟子という關係を残しながら、教授を公的な学校で行うことに転換した。<sup>(20)</sup>翌八月、火術方役所は壮猶館と命名され、名称の上でもこれを明確にした。<sup>(21)</sup>そして西洋流砲術を教授するだけでなく大砲の鑄造、彈藥の製造、管理、運用、翻訳などを担当する機関として一層整備された。<sup>(22)</sup>

こうして壮猶館は発足したがなかなか入学者が増えなかったようである。安政四年(一八五七)に岡田助右衛門は上書をした中で、安政元年に出された指令について、「兎角被仰出之御主意貫通不仕哉にも存上候」という。その理由として次のような二つの傾向をあげていることは注目される。

本邦古伝之火術は、中興戦国実地経験之器に而、新伝之儀はいまだ皇国実地に用不申事ゆゑ、得失如何可有之哉杯と、偏に旧染に固泥いたし、或者新伝火術は年々々々相聞け、日新之発明に出候技に而、昨日迄是と心得候事も今日非と相成候事多く、如斯新発明之奇巧に出候要術に候故、人情却而是等之所よりして半疑半信を生じ候者多く、格別之見識も無之而者、西洋火術に者難進哉にも被存候<sup>(23)</sup>

この状況は文久年間(一八六一)に入つてもすぐには大きく変わつてはいない。壮猶館が発足した「其砌は一旦出坐も有之候へとも……其后之稽古人次第に相減」つてきた。これは人々が、砲術教授といつても「手続等稽古而已にて畢竟実用の稽古薄き様に存候哉」、これでは壮猶館を設けた「御趣意も貫通不致折角御取建之詮も

無之儀候」。ようやく「角場」ができたので「玉放稽古」を始めるといふ。これは文久二年(一八六二)六月一九日のことであつた。

この時、同時に蘭書読方、蘭医書会読をはじめている。さらに蘭医師試験も壮猶館に移すこととした。<sup>(24)</sup>医師の試験は天保十一年(一八四〇)より明倫堂で実施してきたものであるが、これを壮猶館へ移すといふことは蘭方医学が伝来の漢方医学より独立したことを表す。藩はすでに文久元年八月、黒川良安に種痘を行うことを許していたが、<sup>(25)</sup>翌年六月一〇日には郡方の医師で種痘をしようとするものは「種痘之法、御医師黒川良安等より致伝習可致種痘」と指示した。<sup>(27)</sup>これは種痘に効果があり人々の関心が高まつてきたことを示すとともに、ずさんな実施による災厄を防ぐための措置であつたといえる。このように蘭方の効果が認められる中で壮猶館での蘭方医学の教授が始まつた。

航海術も、文久二年から始まつた。幕府はすでに安政四年(一八五七)、江戸に軍艦操練所を設け、諸大名家中陪臣まで有志のもの稽古を認めていた。<sup>(28)</sup>加賀藩では文久二年九月、「御家中並陪臣たり共、壮健之者は、江戸表御軍艦操練所へ被遣、又は実地研究も被仰付」こととなつた。これはようやく洋式軍艦購入の方針を固めた結果であつた。これよりさき安政二年に設けられた長崎海軍伝習所には各藩からも伝習生が集まつたものの、加賀藩からは派遣されていなかったようである。文久二年二月に横浜で購入した蒸気船は、翌年三月一七日には金沢郊外の宮腰に到着する。これに先立つて文久三年二月に「今般壮猶館航海測量学稽古被仰付候間、御家中並陪



臣たり共、望之者罷出稽古可致候<sup>(30)</sup>と達した。これにより壮猶館では航海術もあわせ教授することとなった。この後、壮猶館は海軍のための訓練機関にとどまらず、補給修理、運用の機関となっていく。

このように壮猶館は、文久年間には陸海の軍事技術と医学を教授・運用する洋学の中心となり、藩内でますます重きをなしていくのである。

## 二、尊王攘夷の高まりと洋学への批判

洋学の教授が盛んになると、それへの批判や反発も強まってくる。早くも、嘉永六年（一八五三）一月に藩は次のような達しをだしている。

大船大炮之類、近來西洋諸国にて發明致し候弁利之品も有之候に付、船炮造製方等製用法をも御用ひ有之事に候

元來砲術之儀は異国伝來之品に候処、追々研究いたし當時夫々流儀も相立候得共、西洋新規之業に至候ては未だ相聞けざる故、簡銘貫数玉薬其外之器械に至、蛮語を其俣御用候類不少、打方訓練等之節も蛮語之合図を以進退駈引致し、蛮夷之挙動に倣候類も有之哉に相聞候

此度西洋術習練之儀は被仰出も有之、追々熟達之者も相増、世上広く行はるへき儀に付、此節より蛮語之分都て国語に訳し相唱、若難訳儀は別段に唱呼相立、蛮夷之挙動に不押移様心掛修行可致候

且又大船製造之儀は猶更新規之事に候得は、是以唱方等其心得可有之候

畢竟彼方之利器要術を取、此方之武備相用候事に付船炮其外要用之

器械蛮制相用候儀は聊不苦事に候得共、万一新規を好、猥蛮語を唱、夷風を倣ひ候様成行候ては御国威にも拘り不容易に候條心得違無之様可致候<sup>(31)</sup>

ここでは、いわば西洋かぶれについて問題にしているのであるが、後に現れるような個人の思想や風俗の問題よりも、その結果としての「御国威」の問題として出されていることに注目しておきたい。もともとこれは幕府の指令を<sup>(32)</sup>ほとんどそのまま達したものであった。

壮猶館で蘭書読方などを始めることを達した翌日、すなわち文久二年（一八六二）六月二〇日、藩主は士風振興について、「旧習一洗、文武を励み奢侈を禁じ、士氣奮起武備調候様有之度候<sup>(33)</sup>」と達した。これに対し藩士豊島安三郎より建議があった。それは伝統的な武士の倫理を強調するものである。「攘夷勤王」の動きにふれるものの他藩や外国の動きを知るといふにとどまり、特にそれに与するという主張ではない。むしろ航海術の学修のために江戸または長崎に派遣すべしというものであった<sup>(34)</sup>。

しかし尊王攘夷の動きは藩内にも様々な影響を与えていたのである。九月二七日、藩主は西洋流大砲は「此方之軍備の一助」とするという方針を示した。この達しの中で、「中に者悉皆西洋之陣制に相改候様に与之議論も有之」と指摘していることは注目される。ここで「悉皆」ではなく「一助」という方針をとるのは「西洋に於て至当之軍制も此土に取ては用ひ難き趣も可有之、戦勝之元は全く軍制のみに無之」という理由による。そして「他国之儀は如何様に

有之候共、当家に於ては本朝固有之勇武を本とし、皇国之兵法を以唯今にも一戦快く可致覚悟」であるとし、この点での藩内統一を達した。<sup>(35)</sup>

この達しは「此土」すなわち日本の国情と戦術という面から問題をとりあげていることに注目したい。この時期、蒸気船を購入しようとしていたが、藩の軍事力の実態としては「一助」という域をこえるものにはなっていない。

文久三年（一八六三）七月一四日、藩主は尊王攘夷、公武一和を表明した。<sup>(36)</sup>これは藩内外の状況の変化におされた結果であるといえる。中一日において、壮猶館についての達しを出している。「壮猶館建置候儀は、彼之利器を熟察之上取捨いたし取用候為之儀に候」。これはそれまでの方針の確認である。しかし、この時期にこれが出されたということは、壮猶館に対する批判が高まっていたことを示すものであり、壮猶館の活動に何らかのブレーキをかけるねらいがあったといえよう。達しはいう。「左候へば教諭方等、都而彼之法則に拘泥いたし候儀は心得違」である。そして「是迄西洋法を相学候者、其本意を失ひ候族は、自然与夷狄之風習に染着いたし候。ケ様に而は追々夷狄之俗に相成、不容易次第」となると危惧している。そのため、「彼御法則に不拘、我国実用之宜敷所に活用せしめ候儀専要」であり、壮猶館の訓練においても「身体動作等成限一変せしめ」ることを求めた。<sup>(37)</sup>先の嘉永六年の達しでは「御国威」として問題をとらえていたが、今回の達しは直接、「風習」、「俗」を問題としているの

である。

この具体的な対応は、諸士と銃卒にわけて示された。諸士の小銃打方の「足並稽古」、「彼方之太鼓稽古」などを差し止めた。これらの稽古を続けると、「自然与武術之稽古方等閑に相成、士氣を失候にも至」りかねないというのである。しかし、銃卒は諸士とは違い、「卑賤之者」であるので足並稽古をやめるのではないが、「可成丈夷風を省き度」という。

銃卒の稽古は基本的に続けなければならないということとは否定できない。直接の戦闘を行う鉄砲隊はなくすることができないからである。しかし「夷風を省」くための具体的判断はできないので、「此所役人共其心得て工夫いたし候はゞ、如何様にも可相成儀与存候」と下駄を役人に預けてしまうのである。とまれ、ここで、身分の高い士列以上のものと「卑賤」な銃卒とで行動基準を分けることによって、「皇国之美風」を守ることが専ら士列以上が責任を持ち、現実の軍事的必要は卒が担うという方針が示されていることに注目したい。

大野木仲三郎は、この達しを受けて、同月二三日に上書する。すなわち、勤王攘夷には御家中の一和が必要なのにそうなっていない、「賞罰を正しく正邪を明に被遊候はゞ、一月を待たず士氣振興盤石の御国と可相成儀、疑所御座有間敷候」、そのためには「壮猶館御廃絶被遊候に止り申候」というのである。

其所以は、開国の説を主張仕候人々は、彼徒に多く御座候而已なら

ず、御趣意をみなし候者も御座候間、是等を御誅罰被為在候はゞ、忽勤王攘夷に一致可仕候。少し才氣有之者共は、大方彼が理説にまよひ、又は道具の奇巧に驚き申候。夫士卒を死地に入れて戦ふは兵法の骨髓にて良將のする所、義経一の谷の戦い、韓信背水の陣の如く、死を決しての武勇は無策に出申ものに御座候。彼の遠町を飛ぶ火器を悦び、百里を走る船に心をうばる、などは、目前の理屈に惑ひ、勇を専とする御国体を失ひ、畢竟死を恐る、柔弱心より出申候へば、更に皇国の兵法にかない不申。先達而被仰出候御軍制の御親翰は、実に御尤至極の当然に奉存候所、被仰出候後も御趣意貫通不仕、愈夷流盛に繁昌仕候は、西洋の徒被仰出候御策略をみなし候故に御座候<sup>38</sup>。

大野木はこの後もしばしば意見を上書するなどしているが、これは藩内に壮猶館を敵視する勢力が生まれていることを示している。

この後、八月一八日の政変が起こり、京都が情勢の焦点となる。これは「公武合体派がまき返しをおこない、尊攘派を京都から一掃し、政局の主導権を奪取した<sup>39</sup>」といわれるが、攘夷の課題が解消したのではなかった。こうした中で、洋学に対する風当たりも、一段と進行する。

文久三年（一八六三）二月、甲村休五は学校についての上書を提出した。これは現在の藩の学校の荒廃を批判し、「聖賢治国の道」により人物を育てなければならないという。それは同時に洋学批判になる。まず「西洋学の義は器械航海術等の外被用候程の義御座なく候」ととらえる。甲村は西洋の技術について大野木のように全面的な否定はしていないことは注意すべきである。しかし「近頃ハ盛に行れ右学に凝候者共新奇を喜候て夷賊の教導までも信じ候者も在

之彼の政事をも無思慮致主張候義は全く聖人の掟に違ひ人の人たる大道を不存故に御座候」と批判するのである。そして「高位高官の御面々方まで右学主張被致候」といい、このままでは「土教風俗とも相成以後無窮の患害相生可申候」として、江戸ではすでに「胡服」「筒袖」を着たり、「ドンタク」「ペケ」など西洋語を使うことが流行していることを指摘し、厳しく取り締まることを主張するのである。ここで藩上層部の動きまでふれていることは、これらの動向が広く噂として伝えられていたことである。甲村は物価の上昇を抑えないのは洋学の主張に従っているからだともいうのだが、これは下級武士や町人の不満を洋学に向ける動きがあったことを推察させる。ここに示されるような考えは隠然と勢力を形成していた。そうしてこの対立は、藩の海防策をめぐって現れることになる。

### 三、海防策をめぐる藩首脳部の対立

文久三年（一八六三）二月二〇日、藩主は西洋兵法の導入について再び達しをした。その趣旨はこれまでと同様であるが、「役頭等之内にも、自己好悪にまかせ不致一致躰にも相聞、甚如何之儀と存候<sup>40</sup>」とのべていることが注目される。今回は壮猶館の教育法の問題を越えて、教員の問題についていっているのである。

奥村伊予守栄通の「御用方手留附録」によれば、「兎角西洋流盛に相成候貌に而、壮猶館向者別而頭も張込強、如何之儀に被思召候。右頭之内西洋偏心之者も有之躰に付、一兩人御免可被仰付候哉と思召

候へ共、此儀者猶更追而可仰出候」。このような状況の下で、海防方より佐野鼎、岡田助右衛門の役儀任命について伺が出された。

佐野鼎は旗本家臣で、かねてより蘭式銃砲の製法及び操法に優れており、安政元年一月に、一五〇石で藩に抱えられ西洋炮術師範方棟取役となっている。万延元年（一八六〇）には幕府の遣米使節に従ってアメリカにわたり、帰国後、文久元年（一八六二）九月、再び藩に出仕した。<sup>42</sup> 岡田助右衛門が安政四年（一八五七）に上書を提出したことはすでにふれたが、岡田はそのなかで「新伝火術」の優れている点をのべ、その充実のための方策について献策した。また、軍艦を製造すること、海防の持ち場を持たされたときには西洋火術、航海術、異国兵法、天文・測量・地理・暦数などに通ずるものがないなければならないことなどを提案していた。<sup>43</sup>

この伺に対して次のような指示がだされた。

「佐野鼎手前之儀、伺之趣に候へ共、加様之者頭並被仰付候而は、御家中之人々不心服にも可相成に付、不被仰付候」ここで、「人々不心服」を警戒していることに注目したい。西洋学術導入の問題はもはや藩主の威光だけでは押し切れなくなっているのである。また押しきろうという強い姿勢がとれないことを示している。

これに対し岡田の場合は様子が異なる。「岡田助右衛門儀、御馬廻頭帰役可被仰付哉之旨伺有之候。助右衛門儀も西洋流執心之様にも候へ共、元有沢家之兵学も心得罷在、全く西洋流と片寄候儀は無之鉢に付、助右衛門は伺之通可被仰付と思召候」。岡田の場合は、有沢流という伝統的兵学の素養があるという点が西洋流一辺倒ではない

という根拠とされている。

この時は本多播磨守政均も同席していたが、その退席の後、藩主は奥村に人事のことをいろいろ尋ね、なお調べて報告するように命じた。この段階では奥村は藩主の意見と一致している。

しかし中一日おいた二三日、奥村伊予守、本多播磨守、長大隅守、内膳が定日より藩主に会見したあと、本多ら三人は奥村に海防方の辞任を申し出た。これはこの度の藩主の指示では「外に可然御領国之御手当方見留も無」とし、「兼而之心組と表裏故、何分海防方御用も相勤兼候に付御断申上」というのである。奥村は、それならば「紙面に相認」めて差し出せというが、三人の決意は固く、紙面はあとから出すのでまず口頭で申し上げるという。さらにいろいろ説得したが、決意はかわらなかった。しかし、奥村は内膳の叔父にあたる立場から、別席において、本多と長の差し出す紙面に内膳が名を連ねることを禁止する。これはその主張に反対というより、「不容易御時節、御上之御難題をも不顧、不束に御断申上候儀に而は有之間敷」ということであり、ひいては自分の立場をまもることである。このあと、奥村は藩主に呼び出され、一昨日藩主に尋ねられた人事の問題について報告と意見をのべている。同時に先の三人の意向と状況を伝えている。

翌日、奥村は辞任を思いとどまるよう書面を本多に送ったが、そのあと本多と長、二人の連名で辞任の紙面がだされた。それは、「御趣意之趣を以、幾重に茂相勤申度奉存候へ共何分跡々見留付不申」

これでは「御用被仰付置候詮茂無御座、却而不御為儀」であるというのである。もちろん当時のことであるから、藩主の考えに反対だとはいつていない。その意向にそって役目を果たしたいが、それでは実現の見込みがたらず、かえって迷惑をかけるという理由を掲げているのである。本多、長は前田家の八家の筆頭と次席にあたる家老である。このような辞任願いは、理由はどうあれ藩主の意向に反対することになる。

次の二四日に、再び本多、長連名の意見書が奥村に届けられた。ここでは、「今般被仰出之趣は、少と会得も仕兼候辺も御座候」と、藩主に説明を直接聞いたが、藩主の意向は「西洋之儀は利器を御取扱遊度思召」であつたが、最近流行した結果、「御国政にも御指障に相成候様次第も御座候故、西洋流之儀は全御取用不被遊程之思召」であつた。しかしこうなつては海防の手当をどうしたらいいかわからないというのである。海防については、来年は「六万金」をあてて対応を予定しているが、銃卒の取り立てや大砲が必要である、また軍艦も増やしていかなければならない。「西洋之儀は新伝に而手広に御取建無御座而は、成功之処如何にも遅速利害も御座候」。西洋流といつても身体動作までも取り入れるのではなく、「利器」を用いることを申し上げているのであるが、「利器を御用い之時は御手広に不被仰付候而は開け不申品」である。藩主の意向に従えば、「是等之処如何相心得可宜哉。何分致様も無御座、只恐入候次第に御座候」。

さらに重大だというのは、このままでは「西洋を学び候者は、御

役儀御免にも可被仰付候程之場合江も可到候哉」。そうなれば、「御家中之人々折合方之処も無覚束、其場江到り候而者可施手段無御座候」と心配を表している。

本多はこの年六月より京都にあり、この十月に金沢に帰ってきたばかりであつた。それゆえこれは『航海遠略説』をめぐる長州藩の動向<sup>(4)</sup>を念頭に置いていると考えられる。藩主がこのような見解を示すことは洋学排撃を強めることになり、その結果藩内が分裂したり、互いに抹殺しあつたりするようになってはいけない。それは避けなければならぬという思いである。もちろんその前提には西洋の技術が不可欠であるとの認識がある。それは藩の運命を考えてのことであり、藩主と対立したり責任をのがれようという立場のものではない。事実、あわせて届けられた奥村宛書簡においても、海防方についてのみの辞任であつて、他の用儀についてはこれまで通り尽力するつもりであるとのべている。

これに対して奥村は同日、返書を書いている。自分はこれまで、この度の藩主の意見がかえつて藩主のためにならないとは考えていなかったが、今回の「紙面之趣に而打返思慮も仕候処、全心得違に而、……都而御同存之心得に相成り申候」。本多と長の意見は奥村を動かした。これまで賛同していなかった奥村が考えを変えたのは、「御家中之人々折合方之処も無覚束、其場江到り候而者可施手段無御座候」という点ではなかったか。

翌二五日、奥村はこの間の経過報告の書面を藩主に提出し、これまで誤った考えをのべてきたことを以て、身分の進退伺をする。そ

の翌日、これに付き何の沙汰もなかったので、奥村は側用人に藩主の返答を聞くことを依頼したが、「身分之儀被相達候に不及」旨伝えられた。奥村は重ねて、海防方の辞任を申し出ている。

二十九日、藩主は奥村をはじめ本多、長、内膳に対し、「先づ是迄之通可被相勤候」と指示する。これに対し奥村は本多等にも伝え、直ちに請け書を提出した。

年が明けて、元治元年（一八六四）正月二十九日、藩主はこの間のやりとりの決着として本多に対する処分を決定した。「播磨守儀、存寄有之に付、月番・加判並城代方用令免許候。公儀用・組頭之儀は、可為是迄之通候」

この「存寄有之」という点は家老たちに示した別の親翰では次のように説明されている。すなわち、「播磨守儀、才氣も有之候得共、兎角我意を張、各示談方一和不致体に付」というのである。ここでは本多が「我意を張」る、すなわち自説を曲げないことを批判している。その問題性を「當時勢に候得者、別而各一和无之而は、総様仕向方に茂指障候様に相成、左候へば不容易儀」ととらえている。これは本多等が、西洋技術の批判を強めれば藩内世論がわかれるとして、「御家中之人々折合方之処も無覺束、其場江到り候而者可施手段無御座候」とのべたことに対して、「各示談方一和不致体」となっているというのであった。これは本多等の意見を抑えている形を取りながら、実は攘夷派の不満を抑えるためのとりあえずの措置ではなかったか。

これに対して、奥村、長は、「我意を張」ということが昨年来の海防方についての意見に関係するならば自分たちも同じであるから辞職したい旨伺ったところ、翌二月一日、本多の免職は「同人氣癖有之儀等兼而御承知も被為在」ためであるという。海防方の事についてではないというのである。この時藩主は海防方についての見解は別に示すとした。

二月四日、藩主は三度、西洋流の取扱について指令した。その取扱について意見が違うといって役儀を断るといふのはあるべき事ではなく、「見留無之儀は誰迎も同然に有之候へば、何処迄も尽力有之儀、各之身を不離大任に有之候。そして今まで「西洋流を不取用程」といったのは強くいうためであつて、一切用いないということではない。「近來追々彼流尊信之者多く、其害甚敷に至ては、家中分裂之機なきにしも非ず。且軍制にも指響可申勢」いがある。西洋流を用いるにも「彼に心を被奪」と「我に心定相立、彼之利器を取て眼とする」とは大きな違いがあるという。

奥村はこれを長に伝えるが、長は一二日重ねて海防方の辞任を申し出た。その後も説得に応じず、長は一七日に再び書面を提出する。それは「御両殿様思召御同様には有之間敷」と考えていたからのようである。長の意見は三つの点にあった。そのひとつは「彼に被奪」れてはいけないという点は賛成である。二つには「西洋之儀は新伝之事故、如何にも御手広に不被成置候而は、追々発明之利器も相知れ兼不可申哉」このためにはこれまで通りの方針で行うべきである。三つに壮猶館ではこれまで出された方針に沿って稽古のやり方を検



討しているところだが、これ以上どうしたらいいか。これらについて申し上げ藩主の考えも伺いたい。特に西洋に心を「被奪候」とはどんな場合であるかなど伺いたいというものであった。

長の望んだ「御両殿様」との会見は藩主の病気のためならなかったが、世子慶寧との会見が三月一四日に行われる。長の意見に対して慶寧は、西洋流は捨てるのではなく、「御手広に被仰付候而は御軍制等之指障にも相成候儀、程能不仰付而は不相成」、一律に考えてはいけない、なお納得できないことがあれば何度でも聞くようにとのべる。これを受けて長は海防方辞任の意志を撤回する。

こうして前年来の問題は一応の落着を見た。この落着は表向きは藩主・世子の意向に長が服する形であるが、その実は長の意見にそつて西洋流を廃止しないという方針を明確にさせたことにある。前年一二月の達しの時にも、この年二月の時にも壮猶館の人事が関わっていた。奥村は藩主に対して、「西洋流偏信之者」を具体的に上げ「役儀御免」を提案していたのである。しかしこの落着の結果、新任の許可は出なかったとしても、「役儀御免」も指令されなかった。

#### 四、洋学優位の確立 — 蛤門の変以後

しかしながら、情勢は藩内中枢のあいまいな議論をこえて進んだ。

この年（元治元年）、慶寧は藩主の名代として上洛することになり、四月の末、金沢を出発した。慶寧は京都では長州藩のために周旋を引き受ける。七月一九日の蛤門の変が起こり激しい戦闘が行わ

れた。蛤門の変がおこると慶寧は家臣に禁裏護衛を指示しながら、自らは病を理由として退京してしまふ。

このことはすぐに朝廷や幕府から問題となつて、慶寧を取り巻く尊攘派は「元治元年をさかいとして加賀藩からは、完全に一掃された」<sup>(45)</sup>。これは加賀藩のことだけでなく、全国的に見ても、「ここで古い尊攘派は潰滅した」<sup>(46)</sup>といわれる。これにより西洋流を重んじることへの障害は軽減されることになった。

早くも七月二三日には、年寄村井又兵衛が月番、加判に復し、二七日には本多播磨守が同じく月番、加判に復した。これは西洋技術導入側の復権である。この月、大筒組を発足させるにあたって、「自然大筒稽古は足輕共に限り候様心得候向も可有之哉、諸士においも熟達之者御用候条、心懸次第弥可致執行候」<sup>(47)</sup>と布告している。

さらに八月には四力国連合艦隊が下関を攻撃し、占領した。

この間の戦闘は西洋流の軍事技術の意味を加賀藩に認識させることとなったであろう。一〇月一六日、持弓組三組をすべて筒とする。これまで持手組七組の内、四組は筒、三組は弓であったが、弓の三組を筒に変えるというものである。これまでの筒は豊島流であったが、今回の変更の分は酒井流とすることとなった。<sup>(48)</sup>

持弓組を筒に変更するについては家中に波紋をよんだようである。

これについては一一月二四日に御射手の士に家芸の弓術を廃すべきでないと指示している。「諸士之儀は人々弓術等得道具を以其働をなす事に候得者、格別之事に候。別而家芸之人々は常に心力を尽し、芸道可致修行は勿論之事に候」<sup>(50)</sup>



ところで一〇月二八日には旗本・諸手に大砲を属せしむための諮問が藩主よりあり、特に壮猶館で検討するよう、そして「大筒用意之儀、右之通壮猶館頭へ可被申渡候」と指示があった。これに対する答申は約一ヶ月後の十一月二日にだされているが、その中心は「足輕者郡方より召抱候儀を主と可致候」という<sup>(51)</sup>。十一月の晦日には「町方并御郡方・町支配町人西洋流相学候者、八十人御雇いに而、京都江今・明日之内被遣候<sup>(52)</sup>」との記録があるから、この段階で砲術のできるかなりの人数が武士以外にいたことがわかる。この点では答申は現実的な根拠を持っていた。しかし、町人・農民を足輕にするということは藩の立場からはできないことである。

藩主は翌慶応元年（一八六五）正月一日、大筒組の組織について布告したが、ここでは先の答申でのべていた郡方すなわち農民から足輕を召し抱えるという方針はとらず、「家中より役々指出候」とし、大砲についてもそれぞれから差し出すよう指示した。また長柄槍を旗本を除き廃止し、大砲、小筒へ換えるよう指示している<sup>(53)</sup>。

先の弓といい、槍といい、家芸としての立場を認めつつ、大勢としては新技術への移行は着々と進められているのである。蒸気船発機丸は三月に修理のため長崎に向かい出発させている。これは結局、修理ではなく新規購入となった<sup>(54)</sup>。七月には、藩士子弟およそ五〇人を長崎に洋学修行のために派遣している<sup>(55)</sup>。

さらに情勢が根本的に変わったことを示す事件がおきた。十一月二四日、御異風等が西洋新流の銃砲練習を拒んだことに対して処罰されたことである。御異風とは、伝来の砲術を役目とするところであ

あったが、「今度大筒隊御取立に付、臨時指令役被仰付」たのに、「新流稽古御用捨之儀願出に付、段々申論候得共会得不到、強而相願度旨申立」てたという。現在の状況を考えて藩主が指令したことに対してこうした行動をすることは、「於流法利害得失経験罷在候とも、被仰出候上者先新流致研究、其上に而願之趣も有之候得者、筋合も相立可申」である。しかしそうしたこともなく、従来の流法を主張し、そのうえ申し渡しを輕蔑し、仲間の念紙を作るなど「不埒之至」として、中心になった者は「役儀被指除遠慮」など、その他の者は「役儀被指除逼塞」など、あわせて三八名が処罰されている<sup>(56)</sup>。

慶応二年（一八六六）四月には慶寧が襲封する。その後におきた第二次長州征伐が幕府の惨敗で終わるともはや西洋砲術の優位は誰の目にも明らかであった。その中でも最新の筋入銃の優秀さが確立する。八月十八日、「公辺を初諸家共、新流之利器は長防戦争之実地に而何れも相分」つたので、「今般御家中一統新流に御改被成候間、一同筋入銃に相改可申」とした。「手詰之場に臨候而者鎗・剣第一之儀に候」というものの、現在の戦闘は「砲戦専ら之儀」であるという認識に立っているからである。それでは在来の流派はどうするのであろうか。「是迄之豊嶋・中嶋共新流に相改候間、家之流は其俥に而、早速江戸表江罷越、新流之利を研究いたし、追々門弟共教示可致候」。異風についても、江戸で稽古するか、壮猶館で稽古するよう指示する<sup>(57)</sup>。これは前年の騒ぎを念頭においてのことであらうか。

加賀藩における洋学の導入は壮猶館を舞台とし守旧派と進取派の

抗争の中で進められた。情勢の進展の中で洋学の優位が確定していく。この確定の時期は砲術を中心に見ると慶応元年であるということができよう。しかし西洋砲術の優位の確定は、守旧派がいなくなつたことを意味するものではない。<sup>(58)</sup> 明治になってからの回想的記録であるが、当時の壮猶館と経武館の関係として「相互白眼相見るの形があつたという。」「此は単に両館末派間の際に止まらず両館長間に於てすら冷眼以て相接するの状あるおや。」<sup>(59)</sup> このような対立は尾を引いているのである。まして壮猶館で学んだものが藩内で次々と拔擢されていく事態<sup>(60)</sup>にあつて、感情的なねじれはますます強まつていったのではなからうか。

まえにふれたように慶応二年に、「是迄之豊嶋・中嶋共新流に相改候間、家之流は其俣に」と指示したことも、こうした点を配慮したものであるといえよう。明治元年（一八六八）九月、壮猶館を明倫堂と経武館を統合した「学校」に併合したが、これは壮猶館を廃止したというより、経武館を廃止したことに等しい。これによつて、「経武館稽古並入学生会読等暫時御差止」となり、経武館の分は「小銃打込稽古」をするよう指示されたからである。形式上、経武館を廃止しないで壮猶館を廃止する形を取つたところに、当局者の配慮があつたというべきであらう。<sup>(61)</sup> 情勢の急展開に比べて、藩士の意識はまだまだ変わつていないのである。<sup>(62)</sup>

## おわりに——壮猶館の教育史的意義について

最後に本稿での時期、砲術教育の制度・方法の変化はどのような意義を持つて考えてみたい。

まず、家伝、相伝という教授法・教育制度が崩壊し、学校における教授への移行が行われたことを指摘することができる。藩が入学を奨励したのではあるが、それまでの師範に入門して教授を受ける場合と比べて、学校で教授することは学ぶ者を大幅に増加させた。あるいは増加させるために学校という制度を必要としたというべきか。いずれにせよ学校という制度は一面で藩による知識の管理を容易にするとともに、他方、知識の普及を大きく進めたといえる。

この制度・方法の変化と裏腹の関係で、教育内容の面ではそれまで教授されていた多様な流派の武芸が淘汰され、政治権力の選択した流派、すなわち最新の軍事技術に絞つて教育が行われるようになった。集団的軍事行動のためには皆が同じ理解をしていなければ統制がとれないからである。これは、砲術という限られた分野の中のことではあるが、習得すべき技術・知識を共通のものとする考えに到達したことを意味するのではなからうか。

壮猶館で行われた教育は、西洋の知識を教えただけでなく、このような新しい教育であつた。軍事技術を中心とした学校であり、まだ封建制の下におかれ身分制度などで縛られていたという限界はあるが、壮猶館はそれまでの藩校や伝習の方法と比べて、近代的な学校に向かつて大きな一歩を踏み出したものといえよう。

## 註

(1) これまで壮猶館や金沢における洋学については『石川県史』第三編一九四〇年に簡単なまとめがあるが、壮猶館あるいは砲術教育について詳しく述べられていない。

『石川県教育史』第一巻一九七四年でも壮猶館を取り上げているが、年代についての錯誤がある。これは後述の拙稿参照。

小松周吉「加賀藩明倫堂の学制改革」(一)(二)『金沢大学教育学部紀要』No.321 一九七二―七三年では、六、壮猶館の設立と洋学受容の態度として、本稿と同じ時期の壮猶館について、藩主と家老たちの意見の違いについても取り上げている。しかし、小松の関心は「洋学受容の態度」(二二―六七頁)にあり、海防という現実的要求からする海防方や壮猶館の立場と「保守的藩主の立場との妥協によって成立し」、「東洋道徳、西洋芸術」の方向をめざした」(同 二六五頁)と評価する。この評価自体は否定しないが、私の本稿での関心は洋学の受容によって教育組織や教育方法がどう変化したかにある。

倉沢剛「幕末教育史の研究三」一九八六年 では、第六章幕末金沢藩の教育政策 を設け、包括的な検討をしている。壮猶館についてはその第二節で「兵学校壮猶館の創設」としてとりあげるが、壮猶館に直接関わる事項の整理にとどまり、それをめぐる対立などにはふれていない。

拙稿「金沢における洋算教育について——幕末より明治にかけて——」『幕末維新期における学校の組織化に関する総合的研究Ⅱ一九九一年三月。これは若干の補訂の上、幕末維新学校研究会『幕末維新期における「学校」の組織化』一九九六年多賀出版に収めた。ここでは壮猶館の数学教育についてとりあげた。なおこの中でふれたが、壮猶館の組織、特に海軍関係の諸機関についてはまだ不明な点が多く、今後の研究が待たれる。

洋学史の立場からは、岩崎鐵志「高島流砲術の伝播と展開—金沢藩壮猶館の場合—」『中山茂編「幕末の洋学」一九八四年 ミネルヴァ書房 所収』がある。これは「壮猶館の社会的意義を解明せんとするもの」一〇五頁であり、壮猶館前史として河野久太郎の実践と壮猶館成立と展開の二つに分けて検討している。しかし本論文は文久三年の半ばまでをとりあげるところとまり、この時点で「壮猶館の社会的役割が明確になり、役割が大きくなった」一二二頁として、その後の守旧派と進取派の対立を取り上げない。いわば成立史の研究である。

(2) 『石川県史』第三編 一八一―一八二頁

(3) 「加賀藩史料」藩末編上 五九頁。『石川県史』第三編 五二二頁に略史があるほか、前掲岩崎を参照のこと

(4) 『日本教育史資料』第二冊 一一八頁

(5) 同前 一七三―一七四頁。経武館は藩の武学校として、文学校である明倫堂と同時に寛政四年(一七九二)に設置された。

(6) 同前 一一九頁

(7) 「加賀藩史料」藩末編上 五二五―五二六頁、『日本教育史資料』第二冊 一一九頁に同じ史料があるが、前後を欠く。

(8) 有馬成甫「高島秋帆」一九五八年 吉川弘文館 一七一頁

(9) 同前 一一五、一二二頁参照

(10) 「加賀藩史料」藩末編上 五二二頁

(11) 同前 五二六頁

(12) 同前 五二九頁

(13) 前掲 岩崎 一一四頁参照

(14) 以上、「日本教育史資料」第二冊 一七三―一七五頁、『石川県史』第三編 一七七頁

(15) 『日本教育史資料』第二冊 八八頁など参照。

(16) 同前 第六冊 三七四頁

(17) 同前 三五八頁

(18) 和算の場合も同様に考えられ、形の上では藩校で教えることになってしたが、実際は師範に入門した上で学習していた。これが天保一〇年の学政修補によって初步の内容に限られるが明倫堂の入学生全員に教えられることとなった。拙稿「金沢における和算教育—藩校明倫堂を中心に—」『工学院大学共通課程研究論叢』一九九二年参照。幕末維新学校研究会「幕末維新期における「学校」の組織化」一九九六年多賀出版所収

(19) 『日本教育史資料』第二冊 一二二頁。ここでのべている砲術の意義等については、幕府が嘉永六年九月及び一〇月に出した指令にほぼ同じである。同 第七冊 六七六―六七七頁も参照のこと。

(20) 『日本教育史資料』第二冊 二〇九頁には、壮猶館になってからの稽古割があるが、これによると稽古日は師範毎に指定され、自分の門弟に稽古させるようになっていた。これは経武館稽古でも同様であり、火術方役所でもそのように行われたと考えられる。

(21) 同前 一二二頁。壮猶館という名前は詩経よりとったといわれる。「経武館壮猶館」ノ関係」金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵

- (22) 前掲 岩崎 一一五頁参照
- (23) 『加賀藩史料』藩末編上 九〇〇頁
- (24) 以上、『日本教育史資料』第二冊 一二六一—一二七頁、また『加賀藩史料』藩末編上 一二三九、四〇頁
- (25) 『日本教育史資料』第二冊 一〇九頁
- (26) 『加賀藩史料』藩末編上 一二〇五頁
- (27) 同前 一二二七頁
- (28) 『日本教育史資料』第七冊 六八四頁 万延元年六月参照。
- (29) 『加賀藩史料』藩末編上 一二八六頁
- (30) 同前 一三五六頁
- (31) 『日本教育史資料』第二冊 一二〇頁
- (32) 同前 第七冊 六七七頁
- (33) 『加賀藩史料』藩末編上 一二四一頁
- (34) 同前 一二四八—一二五二頁
- (35) 同前 一二九三—九四頁
- (36) 同前 一四二七頁
- (37) 同前 一四二七—二八頁
- (38) 同前 一四三九頁
- (39) 小西四郎『日本の歴史19開国と攘夷』一九六六年中央公論社 二九九—三〇〇頁
- (40) 『日本教育史資料』第六冊 三八二—三八六頁
- (41) 『加賀藩史料』藩末編上 一五二頁。以下、本節の史料は本書上の末尾までと下の二六頁までに収録されているもので、これらについてはいちいちの注記を省略する。
- (42) 『石川県史』第三編 五一八頁ほか
- (43) 『加賀藩史料』藩末編上 九〇〇—九〇七頁
- (44) 田中彰『幕末の長州』一九六五年中公新書 六六頁以下参照
- (45) 下出積興『石川県の歴史』一九七〇年 山川出版社 一九五頁
- (46) 前掲 小西四郎 三三三頁
- (47) 『加賀藩史料』藩末編下 一六〇頁
- (48) 日置謙『加能郷土辞集』一九四二年
- (49) 『加賀藩史料』藩末編下 二二二頁
- (50) 同前 一三三六頁
- (51) 同前 一三二二頁
- (52) 同前 一四三頁

- (53) 同前 三一四—三一五頁
- (54) 同前 三九二—三九九、四〇八—四〇九、四二二頁
- (55) 同前 四一〇—四一一頁
- (56) 同前 四二四—四二七頁
- (57) 同前 四九七—四九九頁
- (58) ここでいう守旧派と進取派は、いずれも藩の体制を維持する立場に立っているものであり、その立場からいかなる方法を探るかの意見の違いであることは注意されるべきである。しかしこの対立の意味はそれにとどまらない。その背景には、家芸が衰退すれば名誉や地位、収入などが失われるという、武士としての現実的な利害関係が存在していた。封建的主従関係の下では、家芸のある者はそれを伝え、家中に教授することが主君に対する忠義の実となる。その家芸が減びることは主君に対する不忠であり、この上ない家の不名誉となるのである。そして下級武士にとつては、そのような名分以上に自らの武士としての存在がどうなるのか不安にかられたことであろう。前にふれた甲村の上書は古い儒教道徳に立ち尊王攘夷の思想の影響のもとにあることは確かであるが、このような下級武士の意識を多少なりとも反映したものであるというべきであると思われる。

(59) 前掲『経武館壮猶館トノ関係』

(60) 同前

(61) 倉沢は、前掲三七二頁で、この壮猶館の学校への統合について、「いずれにもせよ特設された兵学校壮猶館はここで姿を消し、銃隊の訓練も学校のうちに吸収された」という。確かに制度的な形式の上ではその通りであるが、その実質を見たときこの評価は適切とはいえないのではないか。

(62) 洋学の普及が藩主導で軍事技術中心に行われ、町民、農民の中に洋学を学んだものがほとんどでなかったことは、加賀藩ないし金沢地域の際だった特徴であるというべきである。すでに田中喜男は富山と比べて金沢では町人などからの科学者、実学者がでないとい指摘している。田中「金沢町人に見る市民精神の欠落」『加賀一向一揆五〇〇年』一九八九年能登印刷出版部所収 これについては改めて考察したい。

付記 本稿は、平成九年度学園研究奨励金および平成一〇年度一般研究費による研究成果の一部である。

(本学教授)